

2025 年度 聖学院大学

公募制推薦 入学試験 小論文 問題

- 問 以下に掲げるのは、2024 年のノーベル文学賞を受賞した韓国の作家ハン・ガンの小説を始めとする多くの韓国文学作品を日本において翻訳し、広めてきた斎藤真理子のエッセイである。この文章を読み、次の3点に答えなさい。(800 字以内)
- ① 傍線部「サイは、すり傷だらけだ」とは、何がどのような状態であるのか。なぜ「すり傷だらけ」になるのか。

② 筆者は「サイ」が「すり傷だらけ」であることにどのように向き合っているのか。

③ ①②に対するあなたの考えを述べなさい。

サイは、時間的な「あいだ」と空間的な「あいだ」の両方を指す。(中略)

翻訳の仕事も、サイに位置している。(中略)

そしてサイは、すり傷だらけだ。

翻訳された小説を読むとき、みんな、日本語になった海外文学を読んでいると思っている。もちろんそうなんだけど、それは同時に、海外文学をくぐってきた日本語を読むことでもある。

その過程で日本語は無理をする。構文もちがえば語彙もちがう言語で書かれた物語を通過するのだから。だからその日本語には、こすれあってできた跡——もっといえば傷——が、残っているはずだ。そうやって日本語は拡張し、日々、新しい経験をする。

朝鮮語（※朝鮮半島を中心として使われている言語）を通ることに残る跡、または傷は、なんといっても、ごく小さなちがいが残すすり傷だ。

1 章でも書いたけれど、朝鮮語と日本語は基本的に似ている。

語順がほぼ同じであること。「てにをは」にあたる助詞があること。

漢字の借用による「漢字語」をたくさん使うこと。

「です・ます」調と「だ・である」調があること。

敬語があること。

擬声語・擬態語が多いこと、など。

ここまで似ているからこそ、なおさら、小さなちがいが気になるのだと思う。

たとえば複数形の使い方だ。

日本語には無機物や抽象概念の複数形を表す接尾辞がない。だから、「問題」を複数形にしたければ、「問題の数々」なんて言ったりする。

でも朝鮮語の「²ㅏ(たち)」を使えば、「問題たち」という表現がなんの問題もなく成立する。「早く準備なさってください」の「準備」に「たち」をつけて、「早く準備たちをなさってください」と言うこともできる。

名詞だけじゃない。「静かにしてください!」と言うときの「静かに」という副詞に「たち」をつけて、「静かたちにしてください!」と言うこともできる。こういう言い回しに、つい振り向きたくなるような違和しさを感じる。

でも日本語にすると、「たち」を訳せなくて、ざわざわした人間くささが抜けてしまう。「みなさん、静かたちにして!」そう書きたいが無理。翻訳が終わると、そういう思い残しが、見えないすり傷になって残る。

日本語に「雨脚」という単語がある。雨のしずくが落ちてくる様子が筋のように見える、あれのことだ。日常的によく使う言葉ではないだろうが、お天気を伝えるときにはよく見るし、文学作品での描写にも欠かせない。(中略)

ところが、朝鮮語にはさらに、「雪脚」という単語まであるのだ。降りしきる雪の強さ、激しさ、ひたむきさを感じる言葉。でも「雪脚」は日本語に存在しない。

どうして、あるところまではこれほど同じで、その先がこれほどちがうんだろう。「雪脚」という言葉が何度も出てくる小説を翻訳したことがある。いくつかは、「激しい雪」「雪の降り具合」などとしてニュアンスを盛りこんだつもりになれたが、多くは「雪」とするしかない。「吹雪」にはまた別の単語があるので、踏み切れない。

意味を伝える上で問題はないが、やっぱり、訳せなかった雪脚があきらめきれない。この単語の後ろに、雪を見つめている人のまなざし、ソリ（※朝鮮語の「声」）の気配を感じるから。(中略)

小さなちがいは大きな光。翻訳者としてではなく一学習者として、この、ちがいの光をめあてに歩いてきたので、訳せないそれらをあきらめきれない。

斎藤真理子，隣国の人々と出会う―韓国語と日本語のあいだ，創元社